

学校水泳で4泳法を教える必要性について  
幸島 浩貴 (生涯スポーツ学科 学校スポーツコース)  
指導教員 柴田 俊和

キーワード：4泳法 バタフライ 自分の身を守る泳力

## 1. 序論

私はこの大学に入学して泳げない学生の多さに驚いた。さらに高等学校で水泳の授業がなかった学生が多いことを知った。指導要領では4泳法を指導することになっている。しかし、泳げるようにならなかった学生が多い中で、高等学校での水泳の授業がないとなると授業内容の見直しが必要だと考えた。そこでバタフライを学ぶ必要性に注目した。バタフライの泳法は競泳をすることのない生徒に必要なのか疑問を抱いた。学校水泳の限られた時間の中で全ての泳法を習得するのは困難ではないかと考えた。

本研究では、学校水泳でバタフライを教える必要はあるのか、本当に必要な泳力はどのような力なのかを明らかにし、今後の学校水泳に活かしたいと考えた。

## 2. 研究方法

### 研究対象・方法

B スポーツ大学1回生に選択記述式アンケート調査を実施 (男子241人, 女子77人)

## 3. 結果と考察

小学校から高等学校まで水泳の授業が行われていた学生の割合が41.8%という結果がでた。指導要領には小学校から高等学校まで一貫した指導を行うとなっているが、50%にも満たない結果になっている。この結果に比例して泳げない学生が多いのではないのかと考えられる。高等学校では水泳の授業がなかったと回答した学生が36.8%いた。学校水泳で4泳法を習いましたかという問いには、習った

と回答した学生が43.4%、習っていないと回答した学生が56.6%いた。この調査項目では過半数が水泳の授業で4泳法をならっていないという結果だった。さらに、4泳法を習ったと回答した学生を対象とした4泳法が泳げるようになったかという質問に対して、泳げるようになったと回答した学生は34.9%、泳げるようにならなかったと回答した学生が65.1%であった。

学校水泳に求めることはという問いには78.4%もの学生が自分の身を守るくらいの泳力をつけることと回答した。生徒が求める力をつけさせてあげるべきではと考える。

## 4. 今後の課題

4泳法を泳げるようになることよりも自分の身を守るくらいの泳力を身に着けることに重点をおいて指導してはどうだろうか。

例えば、ドル平を教え習得させることによって、生徒は楽に泳ぐことができるだろう。平泳ぎのカエル足ができなくて困っている生徒も、ドルフィンキックなら少し難易度が下がり習得も容易になるだろう。少しでも生徒に泳げるようになったという成功体験を経験させてあげることによって水泳の授業に対するやる気も変わってくるのではないかと考える。

## 参考文献

1. 文部科学省 (2015) 水泳指導の手引き (三訂版) p5, pp. 13-14.
2. 財団法人日本水泳連盟 (2009) 水泳指導教本, 大修館書店: 東京 pp. 16-17.